
カノジョ。

蒼 しょうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カノジヨ。

【Nコード】

N4996E

【作者名】

蒼 しょうこ

【あらすじ】

タカシは高校入学の時にユカリに一目ぼれした。晴れて付き合えることになったのに、こともあろうにユカリの浮気現場を目撃してしまっ。

第1話 「やめたほうがいいよ」

ドア越しに彼女の声が響く。

きつとその長い黒髪を振り乱しながら。

俺のために叫んでくれてるんだらうか？

何もそんな場面を俺に見せなくなっちゃっていいだらうに。

タカシは自分の運の悪さに舌打ちした。

自分の彼女、ユカリと他の男が、校舎裏で楽しげに寄り添うのを目撃した時の心境だった。

二人の顔が近づき、やがて体は密着してー。

何でこんな場面を影から覗かなければいけないのか。自分が凄く間抜けに思える。

家政婦は見た、じゃないっての。

純朴な高校生は見た、ってところか。馬鹿げている。

タカシは足早にその場から離れた。

体育の時間に足をすりむいて、珍しく保健室に行く途中だった。

近道なんてしなきゃよかった。

タカシは自分を呪った。

足の傷が、何だかひりひりと痛む。さっきより、少し強く。

心がざわつくのを覚えた。あれは見間違いだ。そう、思いこもつと
した。

ユカリとタカシは付き合い始めたばかりだ。

同じ高校に入った時に、タカシはユカリに一目ぼれした。

何も染められてない真っすぐな長い黒髪は、タカシの目に刻み付け
られた。

その切れ長の目も、真っ白な肌も。

声を聞いてもいないし話してもいないのに、何だかその存在が頭から離れない。

こんな経験は初めてだった。

それから特に接点もないまま一年が過ぎてしまったのだが。

気づけば季節はめまぐるしく巡り、2年の初夏を迎えていた。

タカシは熱心なサッカー部員で、女子と話すのは得意じゃない。

入学からずっと、サッカー部の練習に明け暮れていた。

かろうじて彼女が『黒脇ユカリ』という事、それだけは聞き覚えた。

あまり喋らないこと、無表情なこと、相変わらず長い黒髪をなびかせていること。

校舎で時たますれ違う彼女の姿から、彼女の人となりを推し量った。

他の女子のように群れずに、よく一人で校舎を歩いていた。

何だか凄くかつこいいと思った。

少し近づきたいような、でも話してみたい衝動に駆られる。

彼女はどんな顔をするんだろう。どんなトーンで相槌を打つんだろ

う。

想像するしかなかった。

学年が変わっても、タカシとユカリは同じクラスになることもなく、特に接点はなかったが、姿を目にするだけで嬉しかった。

見つめるだけの淡い恋に、タカシは諦めきっていた。

自分が彼女と話すところは想像がつかなかったし、話しかける勇氣もなかった。

歯がゆく思いつつも、こんなもんだろ、と思う、そんな毎日だった。

「あつついなー」

サッカー部の練習も終わりがけの夕方だった。

本格的な夏が近づいて、夕暮れはどんどん明るくなっていた。

「なあなあ、これ終わったらラーメン食いかねえ？」

グラウンドをランニングしながら、悪友のツカサが話しかけてくる。

「この暑いのにラーメンって、お前馬鹿じゃねえの？」

流れ落ちる汗を腕でぬぐいながら、タカシは返事する。

「だって、何か食いたくなるんだよ、あそこの親父のラーメン。

あれだよ、サラリーマンが仕事帰りについ居酒屋によってしまう、あれだな。

日々の激務を癒す、そういう存在が俺たちには必要なんだよ！」

おどけたように、ツカサが感情を込めて言う。

「ほんと馬鹿だな、お前」

笑ってタカシはランニングのペースをあげる。

そう言われると食べたくなるから不思議だ。

ふとフェンス越しにグラウンドの外を見ると、見慣れた黒髪が目に入った。

ユカリだった。

タカシは思わず見入ってしまう。

「あれ、3組の黒脇じゃん」

ツカサがタカシの視線の先を見て言った。

「何、タカシ惚れてんの？ 見つめちゃって」

ツカサがおちよくってくる。

「うるせーな」

そう返しながら視線を戻そうとすると、彼女の隣の人影に目があった。

3年生だろうか、背が高い。シャツをズボンから出して、何だかだらしない感じだ。

彼女の肩に手を乗せて、しきりに大通りの方を指差している。

彼女の顔はいつもどおり、無表情だ。

そのうち、男に押し切られるように、彼女は大通りへと向きを変えた。

道を横切って二人が見えなくなるまで、タカシはその後姿から目を離せなかった。

「おっちゃん味噌ラーメンね！」

ツカサが元気良く店の親父に話しかける。

夕方の店内は、厨房の音と客席の話し声で騒がしい。

家族連れが奥でテーブル席についていて、カウンターの二人の席から少し離れた所に、作業着姿の男が2、3人、忙しそうにラーメンをすすっている。

タカシはぼんやりとグラスについた水滴を見つめていた。

ユカリの姿が頭から離れなかった。

「スパイクがそろそろやばいんだよな。

本田先輩が、使い古しでよければやるってゆうんだよ。
お前も頼んでみたら?」

ツカサが早くもグラスの水を飲み干して、新しく注ぎながら言う。

「……………ああ、そうだな」

タカシは、心ココにあらず、と言った風に返答する。

「て、何ぼーっと呆けてんの?

お前注文した?」

ツカサが、タカシの異変に気づいていぶかしがる。

「……………ああ、忘れてた」

チャーシュー麺を頼んで、またグラスの水滴を見つめる。

「何？さっきの、黒脇の事？」

ツカサが切り出す。

「……」

なんと返事をすればいいのだ。むきになって否定するのもかっこ悪いし、

かといって、ああ、そうだよ、と認める勇気もない。

「んー、黒脇はなあ、やめといた方がいいよ」

ツカサは、タカシの返事を待たずに呟いた。

「え？」

思いがけない言葉にタカシが聞き返すと、どんつと味噌ラーメンがカウンターに置かれた。

ツカサはすかさず割り箸をとって、一秒でも惜しいというようにラーメンをすすり出す。

「なんでこのラーメンって、こんなにうまいんだろっ！あー生き返るー」

なんていいながら、凄いペースで平らげてゆく。

俺は死にそうだよ、心の中で呟いてみる。

「はいお待ちどう！チャーシュー麺ね！」

店の親父の言葉とともに勢いよく置かれたラーメンを、ゆっくりとすすり出す。

さっきの、ツカサの言葉に対して詳しい追及をしたいのに、タカシは目の前のラーメンを食べるので精一杯だった。

何と言って聞けばいいのかわからない。

一体、ユカリはどんな子なんだ？

遠くから見ただけでは計り知れないユカリの内面を、初めて考えようとすると自分に愕然とする。

俺はこの一年、何を見てたんだろう。

そしてこの隣の悪友は、何を知ってると言っただろう。

怖くて聞けないまま、目の前のラーメンのチャーシューをかみ締める。

いつもより味がしない気がするのは、俺だけなんだろうか

第2話 このままじゃ。

蝉が夏を引き止めるかのように、みんなと騒がしく鳴いている。

もうすぐ夏は終わってしまうのだ。誰が、何と言おうと、確実に。

ツカサとラーメンを食べた日に聞いた、「やめた方がいいよ」の言葉の訳を聞き出せないまま、晩夏になるうとしていた。

夏休みは部活でぎっしりと埋まり、日に日に鏡の中の自分が真っ黒になっていく、それだけが辛うじて時間の経つのを感じさせた。

暑い空気が体を取り囲み、走る自分の周りを渦まいている。

それは夕闇を抜けて、夜になっても続いているようだ。

振り切るように、練習後の夜も走った。

誰の顔が見たいのかも分からない。学校がなきゃユカリと会う事もない。

自分が彼女を好きなのかも分からなかった。

ツカサや友達と、練習の合間を縫っては海に、山に出かけたけど、

何だか後から振り返ると、にせもののような気がしてしまう。

楽しさが、心をすり抜けていくのだ。

こんな空虚さは今まで感じたことがない。振り切りたい。今すぐに。

そう思えば思うほど、タカシの足はもっと速く前に蹴りだしていた。

もう走れないと思うのに、止まらなかった。止まるのが怖かった。

昼間と比べて気温は確実に下がっているけれど、流れる汗はとめどない。

毎日のように続くランニングのコースはお決まりになっていた。

家の近くの住宅街を抜けて大通りに沿って走っていく。

もういいかな、と思うまで先へ進み続ける。もしくは、倒れるまで。

ランニングの途中でいつも休憩する公園に来た。タオルで汗を拭きながらベンチに座る。

昼間の練習で、もしかしてこの前のようにユカリを見かけるかも、と思ったが、全くそんな事はなかった。

早く新学期になればいいのに、そんな気分になる。

自分のやることは変わらない。ほぼ毎日学校行く。夏休みなんてないも同然だ。

いや、授業がない分だけましだろうか。

夜になっても蝉はうるさくわめく。冬よりも寂しくなくていいのかも知れない。

公園の端の自販機で、スポーツドリンクを買って、一気に飲み干す。飲んだ途端に汗になって流れ落ちてゆくようだ。

ユカリはこの夏、何をしているんだろう。あの時見かけた、あの男と一緒にのだろうか。

考え始めると、怒りとも嫉妬ともつかない感情が湧き上がるのを感じる。

そんな気持ちを持つ立場じゃないのに。自分をおかしく思う。でも、笑えない。

ふと見上げた夜空は、夏なのに星が良く見える。こんな、住宅街の真ん中でも。

空を見上げたまま、タカシはその場に立ち尽くしていた。

会いたい。

あの、黒髪が見たい。

人を射るような、あの目が見たい。

どこを見ているのかわからないような目も。

声を聞いてみたい。

誰とも知らない男に発するなら、俺の耳に届けばいいのに。

「ばっかみたい、もういいよ!」

突然響き渡る声に、タカシはびっくりして持っていたペットボトルを落としてしまった。

声の主の方へ視線を向けると、女が歩きながらでかい声で誰かと電話していた。

「どつしてそうなる訳?今日は迎えに来れるっていったじゃん!」
しんとした住宅街に、女の声が響き渡る。

「だから、どうして……」

かつかつとヒールの音を残して女は公園の脇を通り抜けていった。

夜空から視線を地面に移して、やっと落としたペットボトルを拾い上げる。

しんと静まった公園で、さっきまでの想いがよみがえってくる。

女々しい自分の感情に、行き場をあげたいと思う。

もう、無理かもしれない。そう思い始めていた。

一年半もこんな状態なんて、はつきりいって不健全だ。

心が腐っていきそうだ。

さっきの女のように、でかい声でわめきたい、と思う。

どんなにかすつきりするだろう？

「やめた方がいいよ」と言ったツカサに何度も話を聞こうとしたけど、できなかった。

あれからユカリの話題がのぼる事もなかったし、大体、やめるも何

も、何にも始まっちゃいないのだ。

まだ、何も。

握り締めたペットボトルが、手の中でめきつと音を立てた。

それがまだ、になるのか。それとも、当然、になるのか。

このままは嫌だ。

毎日走れば走るほど、その思いは強くなっていった。

最初は辛いと思った距離も、毎日こなすうちに少しずつ平気になっていく。

それは、自分の中に小さな自信となって確かに存在していた。

こんな風に、諦めなければいいのかもしれない。結果はどうあれ、何か、すること。

何かしなかった。この夏。このまま終わってしまうのは嫌だ。

蝉よりも、タカシはこの夏を惜しんでいるのかもしれない。

まだ終わらせるわけにはいかない。まだ、このままじゃ。

タカシは公園の隅のゴミ箱に狙いを定めてペットボトルをほおった。

それはくるくると回転しながら、ゴミ箱に吸い込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4996e/>

カノジョ。

2011年1月12日20時46分発行